

自動車運転再開の可否について検討した一例 - 視線運動に着目して -

○新田 麻美¹⁾ 壹岐 伸弥¹⁾ 石垣 智也^{1,2)} 平田 康介¹⁾ 石橋 凜太郎³⁾ 奥埜 博之⁴⁾ 川口 琢也¹⁾

- 1) 川口脳神経外科リハビリクリニック
- 2) 名古屋学院大学 リハビリテーション学部 理学療法学科
- 3) 村田病院 リハビリテーション部
- 4) 摂南総合病院 認知神経リハビリテーションセンター

【はじめに】

自動車運転には認知・判断・操作の過程の重要性が指摘されており、適切な操作に至るまでに多様な高次脳機能を要する (Mishon, 1985, 堀川, 2015)。本報告では、操作に関わる運動機能の問題はないが、注意障害を呈した症例の運転再開に向けた介入と残された課題を提示し、高次脳機能障害者における自動車運転再開の可否について検討することを目的とした。

【症例】

70歳代男性で右被殻出血により軽度の左片麻痺が残存するもFIM満点であり、復職に向けた自動車運転が目標となった。認知課題では近位空間における外部座標と自己身体との関係性の構築は良好であったが、@Attention (クレアクト社製)を用いた視線分析では、オブジェクトの固視が困難であった。また、点滅するオブジェクトの追視は視線が右にある状態から左追跡で遅延を認めた。同装置によるドライブ映像 (一人称視点) 視聴時の視線分析では曲がり角や信号への能動的な視線移動は可能も、自転車が左右両端に走行している際に左側へ視線移動がなされなかった。CATは視覚性抹消課題で平均以下、BIT通常検査127/146点で文字抹消試験、星印抹消試験は左右空間とも全体的に見落としがあった。

【病態解釈】

運転行動の階層構造モデル (Mishon, 1985) において、本症例は運転中の周囲との関係性が障害されている。両側への注意分配が必要となる場面で左の見落とし、左の視線移動遅延による危険回避遅延が予測された。

【方法】

@Attentionを用いた注視課題・点滅するオブジェクトに対する視線移動課題、注意分配課題としてお手玉両手キャッチ課題を週1回60分3ヶ月実施した。

【結果】

CAT, BITは変化が無かった。@Attentionによる視線分析では左追跡で速度向上を認め、ドライブ映像視聴では問題となっていた左の自転車への視線移動も可能となった。運転は短距離の通い慣れた経路のみ再開した。

【考察】

視線移動が改善し、対象物に視線を向けることが可能となったが、机上検査の結果から、機能的な改善は認めておらずTopDownの注意による視線の代償戦略を獲得した可能性がある。今後は運転範囲の拡大に向けて、遠位空間と近位空間の注意の転換や、咄嗟の状況判断に応じた操作の獲得などについて、更なる検討を進めていきたい。

【倫理的配慮】

本発表は十分に説明を行い本人の同意を得ている。